



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4055 号 2017.12.3 発行

宇都宮障害者暴行事件 元職員ら 2 人に懲役 2 年 6 か月と 2 年求刑

NHK ニュース 2017 年 12 月 1 日

宇都宮市の障害者支援施設で知的障害のある入所者の男性に暴行を加えけがをさせたとして、傷害などの罪に問われている施設の元職員ら 2 人に対する裁判で、検察は「無抵抗の障害者に対する一方的な犯行だ」として、懲役 2 年 6 か月と懲役 2 年をそれぞれ求刑しました。

宇都宮市の障害者支援施設「ビ・ブライト」に職員として勤務していた松本亜希子被告（25）と施設に入所しながら職員を補助する形で働いていた佐藤大希被告（22）は、ことし 4 月、知的障害のある入所者の男性に暴行を加え、大けがをさせたとして傷害の罪に問われています。松本被告は、別の施設で入所者の女性の顔をたたいたなどとして暴行の罪にも問われています。

1 日に宇都宮地方裁判所で開かれた裁判で、検察は「無抵抗な障害者に対する一方的で執ような犯行だ。暴行はおよそ 30 分間続いていて結果は重大だ」として、松本被告に懲役 2 年 6 か月、佐藤被告に懲役 2 年をそれぞれ求刑しました。

一方、弁護士は「施設の秩序やほかの入所者の安全を守るためだった」などと主張し、執行猶予のついた判決を求めました。

判決は今月 8 日に言い渡されます。

【障害者施設傷害】 2 被告に求刑「一方的で卑劣」松本亜希子被告「対処法分からず…」

産経新聞 2017 年 12 月 1 日



栃木県警の捜索を受ける知的障害者支援施設「ビ・ブライト」を運営する社会福祉法人「瑞宝会」の事務局＝宇都宮市下栗町（斎藤有美撮影）

宇都宮市の知的障害者支援施設「ビ・ブライト」で 4 月、入所男性が重傷を負った事件などで、傷害と暴行の罪に問われている元施設職員で無職、松本亜希子被告（25）＝宇都宮市＝らの論告求刑公判が 1 日、宇都宮地裁（柴田誠裁判官）で開かれた。検察側は松本被告に懲役

2 年 6 月、傷害罪に問われている無職、佐藤大希被告（22）＝栃木県那須町＝に懲役 2 年を求刑し、弁護側は執行猶予付き判決を求めて結審した。判決は 8 日。

この日は被告人質問や松本被告の母親への証人尋問、被害男性の母親の心情に関する意見陳述などが行われた。

被告人質問で松本被告は時折、涙をぬぐいながら入所者に暴力を振るうようになった経緯を説明した。

「ビ・ブライト」での勤務を始めた当初、指導に従わない入所者に口頭で注意を行っていたが、言うことを聞いてくれず、他の職員が入所者に平手打ちをして言うことを聞かせ

ていたのを見て勤務してから1年足らずで暴力を振るうようになったと説明。上司に相談しても「言うことを聞かないのが障害者だからしょうがない」などと返答され、具体的な対処法は示されなかったと振り返った。

一方、男性の母親は「命を落としていたかもしれない。恐ろしいところにわが子を託してしまった。被告には知的障害者の行動に対する理解がない」と述べ、厳罰を求めた。

検察側は論告で、「知的障害者に対する一方的で卑劣な犯行」と指摘。「被害者は命を落としていた可能性がある。職員としてあるまじき行為だ」と実刑が相当と主張した。弁護側は「施設内に暴力を容認する風潮があった。2人は真摯（しんし）に反省している」と述べ、執行猶予付きの判決を求めた。

起訴状によると、2人は社会福祉法人「瑞宝会」が運営する「ビ・ブライト」で4月15日午後6時ごろから約40分間、男性（28）の腰付近を数回蹴ったり左肩付近を殴ったりする暴行を加え、腹腔（ふくくう）内出血や腰の骨を折るなどの重傷を負わせたとしている。松本被告は8月23日、同会が運営する栃木県栃木市の障害者支援施設でも入所女性（57）に暴行したとしている。

男性が重傷を負った事件をめぐっては、内部調査の文書を破棄した証拠隠滅の罪で栃木県警OBの同会元職員2人の罰金刑が確定している。

鳥取) 地域食堂ネットワーク設立 地域の拠点に 横山翼 朝日新聞 2017年12月2日 設立総会に臨む子ども食堂の代表ら=鳥取市役所



各地の子ども食堂が連携を強めている。鳥取市内で子ども食堂を運営する団体や支援団体などが「地域食堂ネットワーク」を設立。11月27日には鳥取市役所で設立総会があり、将来的に地域の拠点になる試みに乗り出した。

子ども食堂は経済的な事情で十分な食事がとれなかったり、独りで食事をとったりする子どもたちに無料や低料金で食事を提供する取り組み。同ネットワークはこれまで個別に活動していた食堂が連携することで安定した運営を実現するのが狙いだ。将来的に高齢者や障害者など子どもに限らない幅広い層を対象とした食堂が加わることも想定し、「地域食堂」という名称を冠した。

総会には、運営団体の代表や取り組みを支援する金融機関や社会福祉法人の担当者らが出席。冒頭、深沢義彦市長が「将来を担う子どもたちを健やかに育み、地域で支え合う社会をつくるのがますます重要になっている。その一つの取り組みが地域食堂だ」とあいさつ。市として支援することを約束した。

大阪ガスのパソコン、第2のご奉公 県内施設に12台 中日新聞 2017年12月2日 寄贈式後、記念撮影に臨む関係者ら=草津市西大路町の大阪ガスで



使い終わったパソコンを児童福祉施設で役立ててもらおう「はじまるくんパソコン寄贈プログラム」の贈呈式が一日、草津市西大路町の大阪ガス滋賀事業所であり、パソコン十二台が県内の七施設に贈られた。

式には施設関係者ら十五人が出席。寄贈先を代表して、彦根市の児童心理治療施設「さざなみ学園」の猪飼久雄園長が大阪ガスの船谷昭夫滋賀地区支配人からパソコンを受け取った。

プログラムは、四年に一度入れ替えるリースパソコンを同社が買い取って実施。社員でつくる慈善団体が作業料金を支払い、障害者らが働くNPO法人がパソコンのクリーニング作業を行う。これまでに事務局を通じて寄贈した数は二千六百台を超えるものの、県の施設が寄贈先になるのは初めて。

施設の関係者からは「今は子どもたちの入試の申請、情報収集にもパソコンが必要な時代。頂いたパソコンを活用したい」といった声も。猪飼園長が「一般家庭と同じように、施設でパソコンを与えるのは非常に難しく、ありがたい」と感謝すると、船谷支配人も「入れ替えるパソコンを使ってもらえるだけでなく、こんなに喜んでもらえてうれしい。今後でもできるだけ続けたい」と応じた。（高田みのり）

ボート界初レース場に障害者支援施設

西日本スポーツ 2017年12月02日



前売場外おおむらに併設されたスープカフェ「CAFE WIN」同店勤務予定のスタッフ



ミネストローネ（左）とかぼちゃのポタージュ



障害者の就労の場にと、大村ボートの場内と同ボートの場外発売所「前売場外おおむら」に、飲食店が新たにオープンする。障害者の支援施設が設けられるのは場外発売所も含めてボートレース界初。両店とも、障害者の賃金向上などをめざす日本財団のプロジェクト「はたらくNIPPON!計画」による助成が建設費の一部に充てられた。

大村本場には2018年2月にレストラン「KINOBUTA（キノブタ）」がオープンする。看板メニューのお子様ランチは大人でも注文OK。アレルギーにも対応した離乳食も用意し、子連れで気軽に楽しめる店を計画している。

それより一足早く、前売場外おおむらでは12月13日、野菜スープが売り物の「CAFE WIN」が営業を始める。新鮮な素材にこだわったスープは各季節のメニューを用意。系列の施設で焼いたパンを使ったサンドイッチとのセットメニューも提供する。営業時間は午前11時から午後7時で、月曜定休。

両店は大村市内の別の社会福祉法人が運営。キノブタは10人、WINは6人が配属され、シフト制で勤務する。WINの運営法人で職業指導員を務める和久井碧さんは「ボートファンもファン以外も気軽に来たいと思ってほしい。スタッフには誇りを持って仕事をしてもらえれば」と話した。

父母への感謝、カレンダーに描く 四肢まひの男性ら作製 三沢敦

朝日新聞 2017年12月2日

自宅への階段の上り下り。子どもの頃からずっと、母におんぶされてきた。年を重ねる母の背中小さく、濟まない気持ちでいっぱい。いつまで続くのだろう——。車いすの生活を送る障害者たちが、日々の暮らしの中で感じた思いを紹介するカレンダーができあがった。

作製したのは、光市心身障害者福祉作業所「つつじ園」（小川浩一所長）。これまでの1

8年間、地元ゆかりの民話や偉人をテーマにオリジナルカレンダーを手がけてきた。が、

計10作に及んだ「偉人伝シリーズ」が昨年度で完結。新たなシリーズとして、四肢まひの障害を持つ穂本（あきもと）伸一さん（61）、中原伸二さん（62）、刈山（うやま）賢吾さん（44）を主人公にした「3部作」に3年がかりで取り組むことにした。

カレンダーのデザイン

パソコンで作業する刈山賢吾さん（左）と中原伸二さん（中央）、穂本伸一さん＝光市



その第1部となる今回は、刈山さんの物語だ。園ではパソコンを使



い、香典礼状や名刺作成などの印刷業務に励む刈山さんの自宅は坂の上にある。1、2月のページでは、園への行き帰りに自分を背負って階段を上り下りしてくれる母君江さん（67）への思いを「済まない気持ちでいっぱいである」と記した。

初の便秘「診療ガイドライン」まとまる 解消に効果とされた食物繊維やヨーグルトが実は… 産経新聞 2017年12月2日

便の形状 (ブリストルスケールによる分類)

タイプ1		コロコロした便
2		ソーセージ状だが硬い便
3		表面にひび割れのあるソーセージ状の便
4		軟らかいソーセージ状の便
5		軟らかい半分固形状の便
6		泥状の便
7		水様便

※「慢性便秘症診療ガイドライン」を参考に作成

ブリストルスケールによって分類される便の形状

人知れず悩む人も多い便秘。日本ではこれまで便秘は病気とみなされず、医療機関を受診しても、効果的な治療がなされないことも少なくなかった。そんな現状を変えようと、消化器内科医らで組織する「慢性便秘の診断・治療研究会」が、日本初となる便秘のガイドライン「慢性便秘症診療ガイドライン」を作成した。これで便秘の悩みがすっきり解決、といくかー。

「患者」は1千万人以上
厚生労働省の国民生活基礎調査（2013年）によると、便秘に悩む人は60歳までは男性よりも女性が多いが、加齢とともに男性の有病率も増加、80歳以上では男性が女性を上回る。高齢化が進む中、日本の便秘「患者」は1千万人以上いるとみられている。

ガイドライン作成メンバーで、横浜市立大大学院医学研究科・肝胆膵消化器病学教室の中島淳教授は『便秘なんてたいしたことない』と思う人も多いが、とんでもない。中でも高齢者の便秘は、命にかかわること

が最近の研究で分かってきた。また、ただの便秘と思っていたら、実際は大腸がんなどの病気が隠れていることもある。高齢化の進展で便秘患者はさらに増えるとみられるだけに、診断・治療体制を整える必要があった」と説明する。

とくに最近、医療機関で問題となっているのが「宿便性腸穿孔（せんこう）」の患者の増

加だ。これは、便秘で硬くなった便が原因で腸に穴が開く病気。かつてはごくまれにしか見られなかったが、高齢者の便秘の増加で多くの病院で対応を迫られるようになっているという。

排便困難や残便感

そもそも便秘とはどういう状態をいうのか。

日本内科学会は「3日以上排便がない、または毎日排便があっても残便感がある場合」としていたが、ガイドラインでは「本来なら体外に排出すべき糞（ふん）便を、十分量かつ快適に排出できない状態」と定義。そのうえで、大腸がんなどの病気による大腸の形態的变化を伴わないもので、排便困難や残便感があつて困っている場合治療が必要だ、としている。

便秘に悩む人の中には「毎日排便しないといけない」と思っている人も少なくないが、週に3回程度の排便でも、腹痛や腹部膨満感、残便感などがなければ問題はない、ということだ。

さて、便秘を診断する上で、大事な要素となるのが便の形だ。便の形状は「ブリストルスケール」という分類で7タイプに分けられている。英ブリストル大学が1997年に開発した分類だ。

このガイドラインでは「1」（コロコロした便）と「2」（ソーセージ状だが硬い便）を便秘の便としている。

ちなみに分類では次第に便が軟らかくなり、「6」（泥状の便）と「7」（水様の便）に至っては下痢になる。

快便法知り予防

便秘の原因は多岐にわたるが、加齢とともに便秘が増えるのは、運動や食事の量が減るのに加え、病気になったり薬を服用したりする人が多いことも関係している。

病気ではパーキンソン病やレビー小体型認知症、進行した糖尿病が、薬ではがんの痛み止めに使うオピオイドや鬱病の治療薬が、高頻度に便秘を起こすことが知られている。

60歳以下の女性の場合は、ダイエット経験がある人や昼食摂取が少ない人ほど便秘が多い。

一方、快便の人に共通してみられる生活習慣として、女性は「一口の咀嚼（そしゃく）回数が30回以上」、男性は「1日当たり1500ミリリットル以上の水分を摂取」を指摘する研究がある。

「弱い推奨」

ところで、便秘の治療といえば、「適切な食事と運動」など生活習慣改善を思い浮かべる人は多い。中でもヨーグルトなどのプロバイオティクスや食物繊維の摂取、腹壁マッサージは、手軽にできる便秘対策としてよく知られている。

ところが、ガイドラインでは、これらの方法は、積極的に勧めるほどでない「弱い推奨」にとどまっている。

しかも、食物繊維については、「過剰摂取は便秘を増悪（ぞうあく＝悪化）する」とし、多く摂取すればいいというものでもないようだ。もっとも、不足している場合の摂取は「効果あり」としているので、適量であることが大切ということのようだ。

さらに運動や腹壁マッサージも、科学的根拠のレベルは低い、としている。コストがかからず副作用もないので、中島教授も「やらないよりはやった方がいい」とするが、「プラス効果はあまり期待できない」とのことだ。

他に大黃やセンナ、アロエなどの生薬は、飲み続けると大腸にトラブルをきたすことから、ガイドラインでは「長期間の使用は避けるべき」としている。

では、治療法は？

科学的根拠がある治療法としては、12年に約30年ぶりに保険適用となったルビプロストン（上皮機能変容薬）などの処方薬を挙げている。

中島教授は「便秘はあらゆる診療科の患者さんにかかわる病気。ガイドラインによって、

すべての医療機関、あらゆる診療科で適切な対処ができるようになってほしい」と期待を寄せている。(文化部 平沢裕子)

障害者らの手作り品一堂に JR仙台駅で展示販売

河北新報 2017年12月2日



障害者の手作り品や丹精込めて育てた野菜が並ぶ

宮城、福島両県の福祉事業所の手作り品を一堂に展示販売する「第9回ナイスハートバザール in せんだい」が、JR仙台駅2階ステンドグラス前で開かれている。8日まで。

宮城県主催で宮城から29、福島から21の事業所が出店。心や身体に障害がある利用者が制作したアクセサリーや焼き菓子など計約1250種類の商品が並ぶ。

農業との連携に取り組む宮城県内の7事業所による「ノウフク(農福)マルシェ」も初めて

同時開催。利用者が育てた無農薬の冬野菜や果物、ジャムなど計約80種の農産物や加工品を出品している。

県から運営を受託したNPO法人「みやぎセルフ協働受注センター」(仙台市太白区)の武井博道事業推進部長(48)は「事業所の活動を広く知ってもらい、販路の拡大と工賃アップにつなげたい。仙台駅で展示販売することは、利用者たちの自信にもなる」と話す。午前10時～午後8時。最終日のみ午後7時まで。

障害者の人権問題に関心、過去最高51% 東京パラリンピックや相模原刺殺が影響か

産経新聞 2017年12月3日

内閣府が2日付で公表した「人権擁護に関する世論調査」で、障害者をめぐる人権問題への関心が51・1%に上り、平成24年の前回調査より11・7ポイント上昇して過去最高となった。2020(平成32)年に東京五輪・パラリンピック開催を控えていることや、昨年7月に相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で入所19人が刺殺される事件が発生したことなどから関心が高まったとみられる。

障害者にどんな人権問題が起こっているかを聞いたところ(複数回答可)、最多は「就職や職場での不利な扱い」(49・9%)。次いで「差別的な言動をされること」(48・7%)で、前回比で8・9ポイント増加した。

調査は昭和33年以降、数年に1回のペースで実施され、今回で12回目。10月に全国の18歳以上の男女3千人を対象に行い、有効回答率は58・6%だった。

表現の魅力を存分に発信 障害者アーティストが作品展

東京新聞 2017年12月3日

自由な発想、斬新な作風で国内外から注目を集める県内の障害者アーティスト九十七人の作品展が六日、さいたま市浦和区の県立近代美術館で始まる。関連企画として、身体表現(ダンス)の公演や障害者アートをテーマにしたシンポジウムも開かれ、「表現すること」の魅力を存分に発信する。十日まで。(田口透)

第八回県障害者アート企画展「うふっ 埼玉でこんなのみつけちゃった♪」。県内の障害者施設など二十六団体がネットワークを作り、国や県も支援した。

二〇二〇年の東京五輪・パラリンピックに向け、厚生労働省なども障害者アーティストの発信に力を入れ始めている。

県内ではアートや福祉関係者が、三十年以上も前から「好きな事を仕事にしよう」と美

術分野に着目して作品を積極的にアピール。海外を含めた美術関係者らの注目を集め、有名ブランドとのコラボや作品買い上げなど実績を積み重ねてきている。

アート企画展に向け制作活動に取り組む工房集のアーティスト。左から2人目は事務局の宮本恵美さん＝川口市木曽呂の工房集で

約百二十人のアーティストが活動する先駆的な「工房集」は〇二年、作品の発信拠点として川口市内にギャラリー兼アトリエを開設。ペン画が美しい斎藤裕一さん（34）はフランスや米国で美術展を開いた。飛行機をモチーフにした渡邊あやさんの作品は、東京都美術館の展覧会で入場者投票一位を取った。

今回の企画展は、「工房集」をはじめ県内の作家が三百点以上の作品を発表。絵画、彫刻、木工、織物などさまざまな分野で、自由な発想に基づいた魅力的な作品に巡り合えそうだ。

関連企画として、九日午前十時からは県立近代美術館学芸員の前山裕司さんや美術家・アートディレクター中津川浩章さんらによるシンポジウム、十日午後一時からは加須市を拠点に活躍するダンスグループのベストプレイスと、タマップダンサーズによる公演も開かれる。

事務局（アートセンター集）の宮本恵美さんは「障害のある人たちの表現の可能性、魅力を通して、それぞれの個性を生かすことや枠にとらわれない大切さを感じてもらえればうれしい」と話している。

企画展は午前十時～午後五時、入場無料。問い合わせは、アートセンター集＝電048（290）7355。



誰でも楽しめ熱い！卓球バレーを知って 日立で障害者と学生が体験会



東京新聞 2017年12月3日
白熱したラリーを繰り広げる参加者たち＝日立市で

障害者やお年寄りが気軽にプレーできる「卓球バレー」を広く認知してもらうための体験会が2日、日立市の茨城キリスト教大で開かれた。市内のボランティア団体「Smile（スマイル）」が企画し、大学や県卓球バレー協会が協力した。

卓球バレーは日本発祥。2019年の茨城国体と同時期に開催される全国障害者スポーツ大会では、オープン競技として実施される。ルールはバレーボールに準じ、1チーム6人で構成。卓球用の台と球を使い、板状の専用ラケットでラリーを繰り広げる。いすに座ったままプレーするのが特徴。

体験会では、知的障害などのある人と学生ら約60人が8チームに分かれ、トーナメント方式で競った。茨城キリスト教大3年の伊東莉奈さん（22）は「スピード感があって驚いた。障害者、健常者問わずに楽しめる競技だと思う」と話していた。（越田普之）

「きょうだいに障害」語らう 福岡で経験共有する会始動 妹への偏見で苦しんだ会長「理解者増やしたい」

西日本新聞 2017年12月03日

障害のある妹がいる福岡市の女性が、同じ境遇にあって悩みを抱える人たち同士で語り合う「福岡きょうだい会」の活動を本格始動させた。障害者への偏見を親族として肌身で

感じてきた人たち。きょうだいの存在を周囲に隠して生きてきた人もいる。「誰もが生きやすい社会に」。女性は大好きな妹を支えるため、障害者への差別をなくす一歩にしたいと願っている。

福岡市の工弥姫（たくみみき）さん（34）の妹由佳さん（33）は、自閉症で知的障害があり、言葉での意思疎通が難しい。1歳違いで、いつも一緒に遊んでいた工さんは、妹が通う障害者通園施設を家族で見学した5歳の頃、妹の障害を初めて理解した。

小学生になると、級友の「おまえの妹おかしいよ」との言葉が刺さった。いじめを気に掛けた担任の先生からは、クラス全員の前で「妹の障害」を話すように言われた。「説明できるほど知らないのに…」。

父は単身赴任で不在。母は妹の世話にかかりきり。下校後は1人でバスに乗り祖母の家に行った。それでも親へは反感どころか、「大変そう」と気遣った。

1度だけ親に声を荒らげた。高校生の頃、掃除や洗濯をしていると、帰宅した母に「こんだけしか終わっとらんと」と叱られた。「いつも我慢してるのに…」。

ずっと言わなかった言葉を吐いた。佐賀県の短大に進学して1人暮らしを始めると、家と距離を置いた。親の電話には出ず、メールの返信もほとんどしなかった。保育士や介護福祉士の資格を取り、就職先を考えたとき、ふと浮かんだのは由佳さんの顔だった。

「障害に理解がある人を一人でも増やそう」。高齢者施設を経て、今は障害者施設で働く人に研修などを行う民間会社「エイド」（福岡市）で働く。研修の講師として、施設の職員や障害者の家族に自分の体験や思いを話すこともある。

講演をすると「障害のあるきょうだいを隠してきた」「実は私にもいる」と、涙ぐみながら打ち明ける人が相次いだ。そうした声に「障害者の兄弟姉妹で語り合う場が必要」と感じた。昨年9月に「福岡きょうだい会」を立ち上げ、会長として今年10月に初会合にこぎ着けた。

「妹がいてくれたからこそ、今の充実した人生がある」。その思いも強くしている。

「弟の存在語らず」「親の言動に悩み」 初会合で参加者吐露

福岡市であった「福岡きょうだい会」の初会合には、福岡県と佐賀県から障害者のきょうだいや親、支援者ら約20人が参加した。

太田信介さん（43）は、自閉症の弟宏介さん（36）の存在を28歳まで周囲に語らなかつた。今は画家として活躍する弟を支えているが「恋人や友達に愛に思われたらどうしようと悩んだ」と打ち明けた。

親と子の悩みも話題になった。ある参加者は「親に福祉関係に就職するようにレールを敷かれ、うつ病になった」と吐露した。

長女に知的障害がある向井信也さん（59）は「姉の面倒は見なくていいと息子に言ってきたが、正しかっただろうか」。船越哲朗さん（50）は知的障害のある次男を含め、3人の子どもに「それぞれの人生を歩んでほしい」と思うが「きょうだいはどう考えているかを知りたい」と語った。

会は今後、2カ月に1回程度集まる予定で、次回は来年1月13日。同年代で話せる場もつくる予定。問い合わせは「福岡きょうだい会」のフェイスブックへ。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

